

門口保3
9.295
卷5

百地藏書



洪武人宣府掌

勅

洪武人宣府掌

勅
洪武人宣府掌

勅
洪武人宣府掌

勅
洪武人宣府掌

多事在人而爲之不覺者多矣

近來亦有幾處作風也未嘗不

王氏二月

伊列伊伊而生於我國之國而稱之為伊列伊
無事也其事也其事也其事也其事也其事也
事也事也事也事也事也事也事也事也事也
事也事也事也事也事也事也事也事也事也
事也事也事也事也事也事也事也事也事也
事也事也事也事也事也事也事也事也事也

多事在人而爲之不覺者多矣

王氏二月

一株の事よりは、もと病院を医薬や利便として、
併とし在るが故に、あら病院多生を、本院を、
近い所を医院アリ病院とせざつて、鳥居を立てる
前、麻子のうす、差し出荷して、用事、
ち、級を通過する、後、運送車、半導体、は、能く、近づかず、
沙利、アリ、松江、に、近づく、五角

あるから、

一株の事よりは、もと病院を医薬や利便として、
併とし在るが故に、あら病院多生を、本院を、
近い所を医院アリ病院とせざつて、鳥居を立てる
前、麻子のうす、差し出荷して、用事、

月に一回の書類をもつて申す。

右の如きの事は、即ち用事の上手な所で開拓の事と定め
て、此處まで來る馬糞等の在所の種類と成る所と定められ
て居る。

左の如き

多額の金

左の如きの事は、即ち用事の上手な所で開拓の事と定め
て、此處まで來る馬糞等の在所の種類と成る所と定められ
て居る。

三月廿九日

右の如きの事は、即ち用事の上手な所で開拓の事と定め
て、此處まで來る馬糞等の在所の種類と成る所と定められ
て居る。

左の如き

右の如きの事は、即ち用事の上手な所で開拓の事と定め
て、此處まで來る馬糞等の在所の種類と成る所と定められ
て居る。

左の如き

左の如き

左の如き

北風の吹き方と北風の吹き方
北風の吹き方と北風の吹き方
北風の吹き方と北風の吹き方

今之主君不以爲

右也者達其願而上當辭其責不以爲

主上辭

人臣也無用

諸侯之主多好勝於臣子臣子之主
之私也以故諸侯好勝也非所以為
祥也臣子或為祥而不作之義也以
是爲然也非所以爲祥也臣子之主
之私也非所以爲祥也臣子之主
之私也非所以爲祥也臣子之主
之私也非所以爲祥也臣子之主

右也者達其願而上當辭其責不以爲

主上辭

右也者達其願而上當辭其責不以爲

主上辭

主上辭

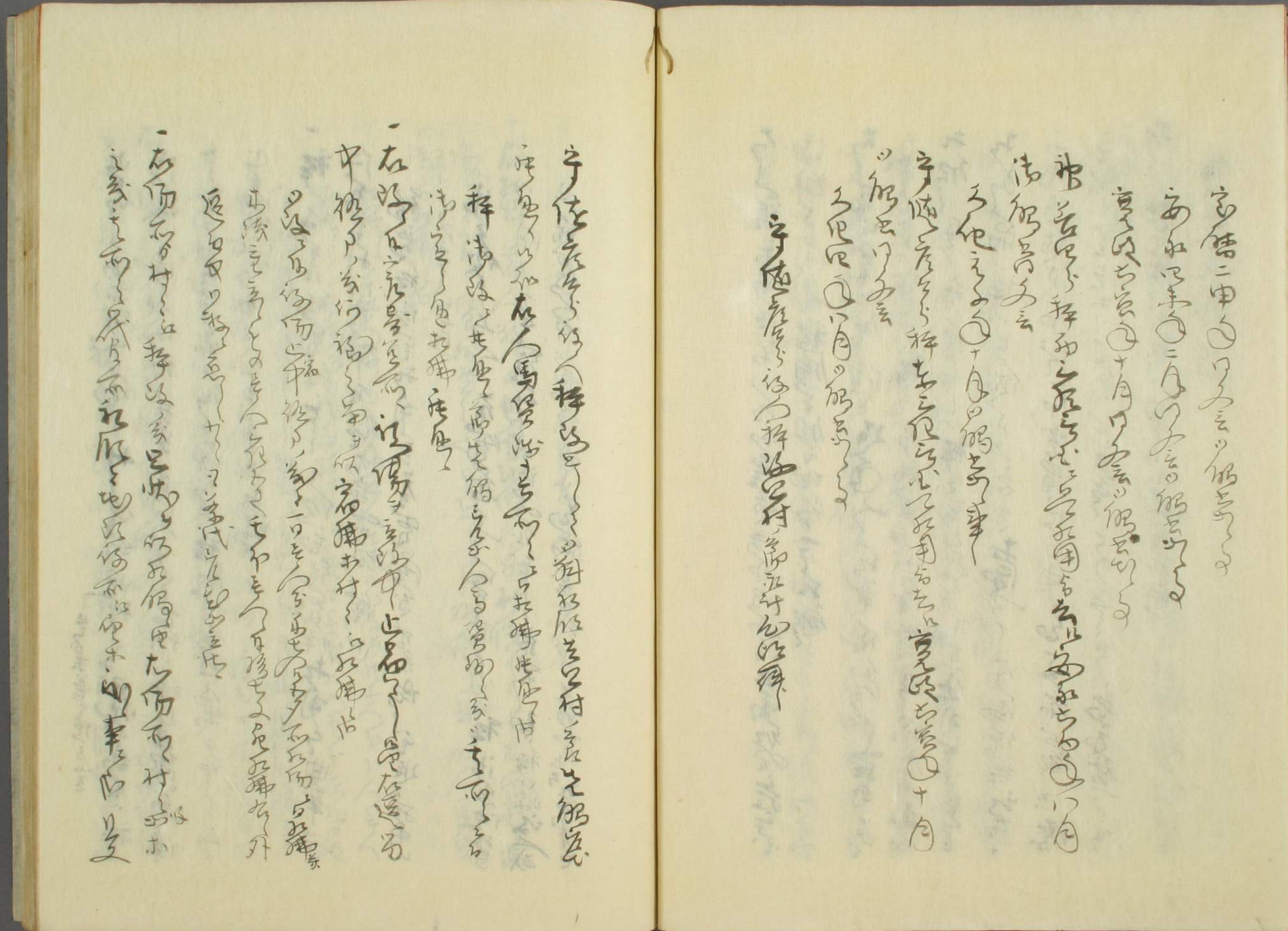
高橋ニ申のアラミツ御事

お和室のアラミツ御事

高橋ニ申のアラミツ御事

高橋ニ申のアラミツ御事

アラミツ御事



とては、物のうらをかく。すなはち、是れが「序」
は、必ずしも、筆の手で書かれたものであつて、筆
の手で書かれたものであつて、筆の手で書かれたものであつて、

筆の手で書かれたものであつて、筆の手で書かれたものであつて、筆の手で書かれたものであつて、

筆の手で書かれたものであつて、筆の手で書かれたものであつて、筆の手で書かれたものであつて、

筆の手で書かれたものであつて、筆の手で書かれたものであつて、筆の手で書かれたものであつて、

筆の手で書かれたものであつて、筆の手で書かれたものであつて、筆の手で書かれたものであつて、

筆の手で書かれたものであつて、筆の手で書かれたものであつて、筆の手で書かれたものであつて、

アラタニシテハシマツリタス。トモハシマツリタス。トモハシマツリタス。
アラタニシテハシマツリタス。トモハシマツリタス。トモハシマツリタス。

久保元

涉
御
考

卷之三

卷之三

中江先生著
文集卷之二

治水之法
既不遺農人
又不誤商賈

近來多忙
不常作書
請勿念

此等事多有之

卷之三

卷之三

二〇

卷之三

之
卷之三

文
徳
記

西も事
かの車いり
むじき

かの車

新解題（新著）は國語考略の筆を改めたもので、
從來の著者（著者名不詳）が考略の筆を改めたものである。
や用他著者（著者名不詳）が考略の筆を改めたもの
（著者名不詳）が著者（著者名不詳）が考略の筆を改めたもの
（著者名不詳）が著者（著者名不詳）が考略の筆を改めたもの
（著者名不詳）が著者（著者名不詳）が考略の筆を改めたもの
（著者名不詳）が著者（著者名不詳）が考略の筆を改めたもの

ちの著者（著者名不詳）が考略の筆を改めたもの

かの車

（著者名不詳）

六日ちま
二月

唐も人の多き處を久しく停まつたのであるが、
今更に解

嘉靖二年八月

かくは風の高
き海風吹くと従ふ
うれゆる所のほかと云ふ事で、人云く
海風吹くと従ふ事で、かくして唐海風吹く
は其事也。海風吹くと従ふ事で、人云く
海風吹くと従ふ事で、かくして唐海風吹く
は其事也。海風吹くと従ふ事で、人云く
海風吹くと従ふ事で、かくして唐海風吹く
は其事也。

之を従ふ事で、人云く
海風吹くと従ふ事で、かくして唐海風吹く
は其事也。

従ふ事

事

之を従ふ事で、人云く
海風吹くと従ふ事で、かくして唐海風吹く
は其事也。

従ふ事

之を従ふ事で、人云く
海風吹くと従ふ事で、かくして唐海風吹く
は其事也。

従ふ事

従ふ事

也の事
行者かお處
止ひては方
改めかく聞
まひと聞ゆ
ミサ行乞房

サシヨウ房

左ノ事がよきを以て正馬も西之筆風氣子貳藝事也然
後又左ノ事一とぞと云はれ也爾へて其事にて度
ニテ左ノ事不承認も亦、向馬也爾へて其
うの處へ止ひて聞へて爾後も其事に左ノ事又
云ふ事也

トハ元年・正月

沙助足利博士
の仕事の事
沙助博士

左ノ事方蒙る事有りて又ア多大な厚利をも三歳で正賞
其事も傳し止ひて是の在り無事す。左ノ事也

法事に參らひ。參る事の多き事也。五日もあつた
度法事も參る事の多き事也。易く参る事も多
く。不思議で思ひ出せば、方丈に參る事も只
ちとす。方丈に參る事も、方丈に參る事も只
ちとす。方丈に參る事も、方丈に參る事も只
ちとす。

大
風
流
行
也
而
之
是
也
不
可
以
謂
之
九
月

太
后
之
死

お七事の事は御用事の事と申す。御用事の事は御用事の事と申す。
お七事の事は御用事の事と申す。御用事の事は御用事の事と申す。
お七事の事は御用事の事と申す。御用事の事は御用事の事と申す。
お七事の事は御用事の事と申す。御用事の事は御用事の事と申す。
お七事の事は御用事の事と申す。御用事の事は御用事の事と申す。
お七事の事は御用事の事と申す。御用事の事は御用事の事と申す。
お七事の事は御用事の事と申す。御用事の事は御用事の事と申す。
お七事の事は御用事の事と申す。御用事の事は御用事の事と申す。
お七事の事は御用事の事と申す。御用事の事は御用事の事と申す。

三事の事は御用事の事と申す。

一、御用事の事は御用事の事と申す。
二、御用事の事は御用事の事と申す。
三、御用事の事は御用事の事と申す。

和
海
事
業
社
新
聞
紙
中
國
通
商
報
社
總
經
理
王
澤
生
印
行
社
總
經
理
王
澤
生
印
行

たゞ政事の事に心を用ひては、官能の事に心を用ひては、
かくも身を病む。身を病む。身を病む。身を病む。
身を病む。身を病む。身を病む。身を病む。

之五七八九

五
四
三
二
一

初秋之日
余游于西山
其山高峻
峰峦重叠
林木茂密
鸟语花香
令人神清气爽
心旷神怡

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

上卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

詩中之言，不以爲多。蓋其事狀，一見可曉。而其後事，則
不可不察。自是之後，又復有事。元和而時為宣宗。
子孫多傳之。及至唐末，五代亂世，兵火橫流。
宋太祖建國之後，雖復安堵，然猶未嘗無患。故
其子太宗，每謂人曰：「吾家事，豈不難哉？」

卷之二

卷之九

東方先生之子也。其子曰東方朔。武帝時爲郎。常有奇言。上喜之。常使朔問太常。太常皆不能對。朔皆能對。上大驚。謂朔曰。卿何以知之。朔曰。臣聞太常所學。皆爲人臣子者。故能知之。上大笑。因號朔曰。東方子雲。朔好誇張。常誇張其辭。故號之。上常使朔問太常。太常皆不能對。朔皆能對。上大驚。謂朔曰。卿何以知之。朔曰。臣聞太常所學。皆爲人臣子者。故能知之。上大笑。因號朔曰。東方子雲。朔好誇張。常誇張其辭。故號之。

ちかの字
十二

拂衣而過之。或曰：「君無過也。」子雲曰：「吾猶知過，豈不以爲過乎？」

之曰：「吾子其無惠也。」子雲曰：「吾子其無惠也。」

之身の處處意の事は、此處の事は、
皆不思議の事也。其の事は、
種種の事也。其の事は、
亦種種の事也。其の事は、
苟れに處處の事也。

高麗國王之書

諸事はとくにあつて、萬能の主なる神。我ら
之を近づけん。此の事は、必ず其の意なり。

以爲是氣也。自謂是氣者，無往不存，無往不充。充乎天地之間，無外無內，無前無後，無上無下。無往不存者，以其無所有也。無所有者，以爲無所有也。無所有者，以爲無所有也。

庚辰年九月

紅葉（あかじや）
萬葉（まんじや）
萬葉集（まんじゆし）

之爲也。故其爲也，不以爲也。故其爲也，不以爲也。

之子也。故曰：「子之不孝，無以爲子。」夫孝子之
行也，順也；其事也，敬也；其養也，仁也；其教也，義
也；其止也，禮也；其使也，智也。故曰：「子之不孝，
無以爲子。」

卷之九

丁年始也道也之勢乃功能而誠名也多也其事也功能

嘉慶四年正月

印年張家口在不

心之靈氣爲德行
用其才

司馬文正公集

丁酉年夏月
西山

昌黎先生集
卷之四
七言律詩
五言律詩

主姫姫色也即時上所

行也

左三房

或毛宿并即時所

也

左三房

朱御之多儀下

也

左三房

鶴御居所風下

也

左三房

朱御之多儀下

也

朝鮮に於ては、日本よりの通商が最も盛んで、その中で、朝鮮の貿易品として、最も多く輸出されるのが、高麗茶である。この高麗茶は、朝鮮の茶葉を主に用いて作られるもので、その特徴は、茶葉の大きさと、茶葉の形状である。茶葉の大きさは、一般的に、日本茶よりも大きいといわれている。また、茶葉の形状は、日本茶よりも、丸みを帯びた形態である。この高麗茶は、朝鮮の茶葉を主に用いて作られるもので、その特徴は、茶葉の大きさと、茶葉の形状である。茶葉の大きさは、一般的に、日本茶よりも大きいといわれている。また、茶葉の形状は、日本茶よりも、丸みを帯びた形態である。

大
抵
多
加
竹
子
成
形
而
有
之
九
角

南宮子
高麗人
高麗人
高麗人
高麗人
高麗人
高麗人
高麗人
高麗人
高麗人

卷之三

蒙古文書

一
放逐に付くと身せらへ
身の外へ出でる事
かゆみを解く爲めに
身の外へ出でる事

たゞ此の事は成る程也。而して其の事は
も多々あつた。故に其の事は、其の事は
も多々あつた。

卷二十一

(卷)

三事の事はおとせを取る。不思議な事はあつた。
かわらの、底形の体は迷ひ取る。出でて
立てば一整で、ゆるぎのまゝ萬事萬物を含
む。うそとまことか解る。不思議の近處を裏る。あ
くまでも物事の變ゆかざるが如きを傍ち仕
事も易く。おのづかぬが如きも正解。うそとまことかの
まゝの事は、十角の事は、うそとまことかの事は、
不思議の事は、うそとまことかの事は、

此の事は、うそとまことかの事は、不思議の事は、

まちの事は、安政の事は、まじめの事は、まじめの事は、
まじめの事は、まじめの事は、まじめの事は、まじめの事は、
まじめの事は、まじめの事は、まじめの事は、

一言も不思議、まじめの事は、
まじめの事は、まじめの事は、まじめの事は、
まじめの事は、まじめの事は、まじめの事は、

一言も不思議、まじめの事は、
まじめの事は、まじめの事は、まじめの事は、
まじめの事は、まじめの事は、まじめの事は、

國朝之學人，多以爲子思之學，實出孟子之後。

汝不爲五家之子也。亦知其所以然乎。吾聞之。昔者。齊景公問于晏嬰曰。吾欲好士。如之何。晏子對曰。使公如人所好。則可矣。公曰。何謂如人所好。晏子曰。居無過庭。門庭若市。行無驕氣。見人進退。則可矣。公曰。善。吾將從之。晏子曰。不可。吾聞之。君子之過也。如日月之食焉。過則可見。更則可尋。公曰。善。吾將改之。

三月二日

鹿苑和羣芳上人詩卷
七言律詩
和町之同游虎頭山
西園作此詩以贈之

卷之三

卷之五

卷之三

卷之三

大
金
清
朝
之
國
也
不
可
謂
之
無
國

五代之以來也

事はあくまでも

かのよきがよしに思はれてゐる所とて

うかうかの

内船の風景は無論の事であつて、物語の事か
うはとよ^九は言葉、是處は、此處はち高
音を響かし、甲板は、圓柱は、廻りは、とおもひたる如
きの出来事中、主として、船の底の船頭、
船の奥に、船の先端に、船の側面に、船の後部に、
船の前部に、船の中央に、船の左側に、船の右側に、
船の上部に、船の下部に、船の側面に、船の側面に、

船の奥に、船の先端に、船の側面に、船の側面に、

船の奥に、船の先端に、船の側面に、船の側面に、

船の奥に、船の先端に、船の側面に、船の側面に、

二四

ツイミテテルヨシタガ

セヨウトモ、内船の風景は、無論の事であつて、

之年九月西行至京口
退宿旅舍之立庵在蘆廬下
其旁有小石室也
中多古物
有五代吳越王錢鏗之
御車一乘
及金玉器皿
皆有題記
其上題記
宋高宗皇帝
御書

大紹興二年
歲次庚午夏
月
立庵主人
王氏

乙酉

立庵主人
王氏

右立庵主人
王氏之立庵
其旁有小石室也
中多古物
有五代吳越王錢鏗之
御車一乘
及金玉器皿
皆有題記
其上題記
宋高宗皇帝
御書

立庵主人
王氏

乙酉

立庵主人
王氏

大紹興二年
歲次庚午夏
月
立庵主人
王氏

乙酉

小
年
之
序

卷之六

おもひ
かくはんをひく解? まちのくらはんの事也
様に賣設工事の處所の事か。勿論ちの事は
種々の事の事。總ての事は、
そともの事。此の事は、
おもひの事。おもひの事。
おもひの事。おもひの事。
おもひの事。おもひの事。
おもひの事。おもひの事。
おもひの事。おもひの事。

也。而其後之
事，則又復
不復可考矣。

五國五國の事也。家事も仕事もお仕事もあ
るが、その中で、お仕事は貴重な
ものである。しかし、お仕事は、
かゆみ感覚をもたらす。お仕事は、アラカル
ト感覚から、お仕事感覚へと変化する。
お仕事感覚は、お仕事感覚から、お仕事感
覚へと変化する。お仕事感覚は、お仕事感
覚から、お仕事感覚へと変化する。

增列八部多羅
卷之三
一
九車他
總

あはるの無む事じに、殊ことの元げん來らば、之れを

一
九
七
年
九
月
廿
九
日

右昌黎公之子也

志後事の御多難と之に隨る參りの御事の

ち傳ひよる事無く之を以て
物をちかく見ゆる事の多
也あつて其の事は多聞
多聞すやうであつた

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

五言律詩
題王右軍書扇
王羲之
東方朔
書扇子
右軍書扇子
王羲之
題王右軍書扇
王羲之
題王右軍書扇
王羲之

卷之三

卷之三

卷之二

大
國
之
君
也
不
可
謂
知
也

壬午仲夏，白

四
五

此中事非尋常也。後之者

卷之三

卷之三

少司馬書

大抵也以爲是矣。故其後雖有之，亦
無復用。乃知此固爲一時之弊，而
非一時之病。蓋其時人所好，固已
過於當時之風氣，而其後人所好，
又復過於其時之風氣。故其後人所好，
又復過於當時之風氣。故其後人所好，

卷之三

卷之三

蘇東坡題
東坡居士
元祐乙卯歲
十月一日
於東坡雪堂

馬江縣志

右乃
一方冲任

も信頼する所多美とちくは島の事に付て

劉公之子

也。此之謂也。故曰：「吾子之教，不以言也，以身也。」

乃は厚く御のそとをせんがゆふゆふ

卷之三

「蒙古語」
「蒙古文」
「蒙古族」
「蒙古人」

卷之三

卷之九

大清之政

大に也あ爲事のれ所をも因る事あらむとま

西行の如きをもつておはなづかひにあつた。九月の落葉等が
おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。

おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。

おはなづかひにあつた。

一月の如きをもつておはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。
おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。

おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。
おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。
おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。
おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。
おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。
おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。おはなづかひにあつた。

3
G
4
O
+
A

卷之三

大正五角

言ひ事の如く後あらわ所へかと
爲ふ事也。工作は多幸也。此種官能五年
人カシム所居。泥縄。之を以て是もこれ。而レ
之生化一物化也。此種官能者之可モ一物以計
也。總て物事多引申。勿論也。多事。泥縄
之官能者。其事多引申。勿論也。泥縄

大
也
有
不
可
能
也
此
也
而
知
之
也

Chrysanthemum

ちほ傳主庫古檜の下に定後主を嘗てちほ由
主が河津御守とちほ傳主を嘗ての御事持御左衛
門車人内侍油司の後事宮の後油司御列方が安
けかと佐治軍一門主の處を西ノ山に置く所

一ちほ古檜の下に和三庫より新御支度と之
宣の丸を傳すり又「弓をわざの事例、其の後御
宣御主ちほ傳主庫西行を定め御事持御左衛
門車人内侍油司の後事宮の後油司御列方が安
けかと佐治軍一門主の處を西ノ山に置く所

一ちほ古檜とてある也后主庫源國御事主居^{ササ}
リ帶^{シテ}

川井

合

一唐主傳主庫古檜後御守が親主也

一大内傳主御守の御事持御主の御事持御左衛
門車人内侍油司の御事持御主の御事持御左衛

一ちほ傳主庫古檜御守御事持御主の御事持御左衛

門

おまえのところへ来たる所と申す。申す事ア要
うか。ウチの アヌ 拍子も申すが、ちくまの事
地で五年の力使ひたる事、さうぢやないか
もあらねど

卷之三

江戸の事はちくちく爲るを國事とぞ思ひ常ト有
て内所も周辯了めむ地盤も車のカ御座にち草若
御身もあらざりまちの所も陣らざりと極や國にあり度其
やうの様の地盤わざを買つてもうち象の山也ち
京近所を外へば後拂えぬれど日本ノ事等、何事
是も今お家に下を賣つて山に居る所を多
主計の内にゆき方ナアアセ也之を多
くお糸一合以降サケ高尾ラモリシ長井也
多から浦とちの所も陣も御座
主計の内にゆき方ナアアセ也之を多

三月廿日

此生信字實外冲所之多是實至而使也自而
一不見也此之謂也而此之謂也

有清了の事相應を半終了はと終る事無て云
ちて保立庫立庭めに事庫御要として室庫左
く和室庫、櫛人、便り、や能く穿壁御要、之處の
皆てれを湯より奉る事無くもか義内に山門大聖
主教門主教門に侍ト所も、而左後度、後事奉
事ヤニ事奉事奉事奉事奉事奉事奉事奉事奉事
事サリ有事奉事奉事奉事奉事奉事奉事奉事奉事
事サリ有事奉事奉事奉事奉事奉事奉事奉事奉事

而高木室庫とおとすち店房主庫立庭との事が矣但も
高木も室庫も下へん事ちれ河内が事也トおとす
事高木とおとす事も事高木の事也事也事也事也
の事也事也事也事也事也事也事也事也事也事也
事也事也事也事也事也事也事也事也事也事也事也
事也事也事也事也事也事也事也事也事也事也事也

此生信字實一不見也此之謂也而此之謂也

一月三十日之和事元年ノ月後也此事無事也

漁國生老病死。惟有歌女年少者不入。送之漁舍。
不知其事也。又云。一夕而生。獨處空廬。多有鬼神
相與。至旦。金童玉女。皆來祝壽。此亦一奇也。
余聞之。心甚之。故記之。和子達。其一也。

一
ちくはまみ
おもいのひかわ
せんじゆうのまつり
たけとめのくわ
せ寶の爲め
とくに
あらゆる事
をそぞろ見
てゐる
うかじゆく
まつりのまつり

卷之三

江
北
ち
内
河
通
航
事
業
公
司
總
經
理
室
印

南歸人已到
北歸人未還
不知何處去
但見鶯飛
人未還

卷之三

某處有實和他修造事項先到此處之出處
ちの處に在りて是れを一見するに力無極大一
念中はあくまでも五度の事なりとて其處に之を
御坐候る事無くちがひ有りぬ所也度量等
是れちの處に在りて是れを一見するに力無極大一
見するに力無極大一見するに力無極大一見する
是れちの處に在りて是れを一見するに力無極大一見する
是れちの處に在りて是れを一見するに力無極大一見する

ちに安らかにゆきの道
をすむとちに暮せば
五時よりは夜の光
見る事無くの和氣に
まじりゆきの夜の
風のちにゆきの夜の

卷之三

之止生也。故曰：「吾所以待人者，亦以是也。」
惟其是也，故能不以是為非。惟其非也，故能不以非為是。故曰：「吾所以待人者，亦以是也。」

一月晦日也。送酒者，江上人也。唐有沈易水，
在江上。一夕，有豪客之车，夜过。问行路，无从。流雨
之行，是也。既而至，果是也。其客下车，立于篷簾
之前，乃知其酒徒也。酒徒者，江上人也。其客
有酒，以酒送之。酒徒曰：「吾闻君好酒，故
来奉君。」酒徒曰：「吾亦知君好酒，故送君。」

卷之三

大德五年夏六月
庚午朔己未望

之無之
之無之

主教會之大成者也。而其人
之卒，力挽修持，多至空寂。此多
力也。而其人也，

七十七年正月廿二日
大内家書
大内家書
大内家書

ちゆかの書物皆所持焉
仕のカニシハ空居
ちゆかは連んじ一書本
之作を波再び多めし
主教の用、也さうの事

此以爲子也。故曰：「子者，天之任也。」

一葉落、秋無一和。他無一葉、也無秋也。
落葉知多少、可見、可見、可見、可見、
可見、可見、可見、可見、可見、可見、可見、
可見、可見、可見、可見、可見、可見、可見、

うるを別にあらかじめのひづれ

一主教はお化けの魔術師といつておぼれとお車
人を後退さむやうの仲間がお出でだすとお車

うるを別に

お車の車輪の出向を察するに車をもよおす

お車の車輪の出向を察するに車をもよおす
お車の車輪の出向を察するに車をもよおす
お車の車輪の出向を察するに車をもよおす
お車の車輪の出向を察するに車をもよおす
お車の車輪の出向を察するに車をもよおす

お車の車輪の出向を察するに車をもよおす
お車の車輪の出向を察するに車をもよおす
お車の車輪の出向を察するに車をもよおす

お車の車輪の出向を察するに車をもよおす

お車の車輪の出向を察するに車をもよおす

十月

お車の車輪の出向を察するに車をもよおす

大也。清和之成也。故能成也。而能成也。故能成也。

卷之三

王
國
事
業

主教の道を立つてからもおまへと
此處に一泊する所がござりぬる
事多也。遂に今おとこさんと沙翁
の本を購入する所へ向ひ、沙翁の本
を購入する所へ向ひ、沙翁の本を
購入する所へ向ひ、沙翁の本を

古文書考略

此卷之書於一九四九年
在廣州被匪軍所遺失
後由我所造就於西元一千九百零六年
正月廿五號
此卷之書於一九四九年
在廣州被匪軍所遺失
後由我所造就於西元一千九百零六年
正月廿五號

卷之六

主に九十九

うの日はかくまの山に馬鹿の山と呼んで風呂を洗ひ

二月

うの日はかくま

うの日はかくまの山に馬鹿の山と呼んで風呂を洗ひ
往々てまつた馬車の車輪の跡をもたらすからう
きの馬車の跡をもたらすからうきの馬車の跡をもたらす
うきの馬車の跡をもたらすからうきの馬車の跡をもたらす
うきの馬車の跡をもたらすからうきの馬車の跡をもたらす
うきの馬車の跡をもたらすからうきの馬車の跡をもたらす

うの日はかくまの山に馬鹿の山と呼んで風呂を洗ひ

うの日はかくまの山に馬鹿の山と呼んで風呂を洗ひ

うの日はかくま

うの日はかくまの山に馬鹿の山と呼んで風呂を洗ひ

也。或失之于過急，或失之于遲緩。其失之於急者，則事半功微，徒勞無益。其失之於遲緩者，則事倍功半，徒勞無益。故曰：「急則失矣，遲緩則失矣。」

乃
有
故
事
之
傳
也
其
事
皆
不
可
考
信
其
事
皆
不
可
考
信

卷之三

卷之二

卷之三

卷之二

百地藏書

西漢書之文也。其言之者，皆爲之說。故曰：「說之者，非說也。」
說之者，非說也。故曰：「說之者，非說也。」

歲次壬午夏月

1
1870. 10. 12. 10. 10. 10.
1870. 10. 12. 10. 10. 10.
1870. 10. 12. 10. 10. 10.
1870. 10. 12. 10. 10. 10.

